
独裁者二匹

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独裁者二匹

【Nコード】

N13830

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

家に帰ると猫がいた。今度は犬が。それが彼の苦労のはじまりだった。犬も猫も我儘です。

第一章

独裁者二匹

国宝昌哉が家に帰るとだ。何かがいた。

家の居間の隅から気配がする。それはわかった。

それで母に問うた。出した言葉はこれだった。

「何かいるの？」

「養子入れたから」

すると母はにこりと笑ってこつ彼に言ってきたのだった。

「養子をね」

「養子!？」

「そう、あれ」

こつ言つてその居間の隅を指差す。するとそこには一匹の猫がいた。

四ヶ月位だろうか。子猫だが少し大きい。頭が丸く目がやけに黒い。しかも大きく丸い。白地で所々に黒や白が入っている。何処かホルスタインを思わせる。そして一番目立つのはその耳だ。どちらも見事に垂れているのだ。

昌哉はその耳を見てだ。すぐに母に問うた。

「スコティッシュフォールド？」

「そうよ、スコティッシュフォールド」

母も猫の種類を言ってきた。

「それよ」

「何でまた急に猫なんか」

「前から欲しかったのよ、猫がね」

母の彼への返答はこつしたものだつた。

「それでなのよ」

「猫をつて初耳だけれど」

「それでもいいじゃない。とにかく猫飼うから」

「また急に話が決まったね」

「そうでしょ。じゃあこれから可愛がってあげてね」

「わかったよ。それじゃあね」

こうしてその猫は昌哉の家に飼われることになった。猫はこの日は部屋の隅でガタガタ震えているだけだった。彼はそれを見て不安な顔になった。

「大丈夫かな、これで」

「ペットショップの人の話だとお店の猫の中で一番悪かったそうだけれど」

「これで？」

「我儘で脱走の常習犯で」

こう彼に話してきた。

「すぐに何か悪さをしていたらしいわよ」

「これでなんだ」

「そうよ、これでよ」

そっだというのだ。

「お母さんにもそうは見えないけれどね」

「当然僕にもだよ」

「まあとにかく」

母はまた彼に言ってきた。

「この猫御願いね」

「うん。そろそろお父さんも帰って来るしね」

そして暫くしてその父が帰って来た。するとだ。

「養子来たぞ」

「まさかまた」

昌哉は玄関から聞こえる父の声を聞いてだ。まさかと思った。

そして実際にだ。玄関に行ってみるとそこに一匹の黒毛の犬がいた。全身黒で小さい狼に似た外見の犬である。それがへっへっへっ、と舌を出していた。

「それって」

「ああ、ペットショップで売れ残っていたの買ってきたんだ」
「そうだというのだ。」
「どうだ？男前だろ」
「まあね。うちで買うんだよね」
「勿論だ。新しい家族だからな」
昌哉に対して笑顔で言うのである。
「可愛がるようにな」
「あれ、犬なの」
「ここで母も玄関に来て言ってきた。」
「猫が今日来たのに」
「あれ、猫もいるのか」
「ええ、そうよ」
父は妻の言葉を確かに聞いた。
「そうなのよ。今日買って来たのよ」
「おいおい、そうなのか」
夫はそれを聞いてあらためて言ったのだった。
「それを知っていればな」
「犬買って来なかったの？」
「まさか」
しかしそれは無いという。そして笑いながら言ってきた。
「それなら猫の首輪も買って来たよ」
「じゃあいいのね」
「首輪は明日買おうか」
そしてにこりと笑ってこう言うのであった。

第二章

「とりあえず今は御飯は」

「猫まんまとワンちゃんには」

「肉か魚の残りとお飯でいいだろ」

「そうね」

その話はすぐに決まった。

「時々ドッグフードかキャットフードも用意してね」

「それでいいか」

「そうね。ただワンちゃんには小屋も用意しないとね」

「それはもう注文しておいたから」

「そう、じゃあいいわね」

こうして家に犬と猫が出て来たのであった。犬の名前はワン、猫の名前はカミナリになった。名付けたのは意外にも昌哉であった。

「僕でいいの？」

「ええ、いいわよ」

「御前が名付けなさい」

両親は我が子に対して笑顔で告げた。

「二匹の名前をね。考えてみて」

「さあ、何がいいんだ？」

「うん、じゃあ」

こうしてだった。彼は何となくイメージで名付けたのだった。それで犬の名前はワン、そして猫の名前をカミナリとしたのである。

後でそれぞれの血統書が来たがそれはもうどうでもよかった。何はともあれ犬と猫の名前は決まった。ワンとカミナリで決定だった。

二匹は家族になった。しかしその彼等はだ。非常に問題があった。

「あつ、こら！」

「ニヤン！？」

カミナリを叱る。彼はテーブルの上に来るでスフィンクスの様に

寝そべっていたのだ。その寝方も顔立ちもさながら王者の様である。

「テーブルの上に寝るんじゃない」

「ニヤンニヤン」

「ニヤンニヤンじゃない」

叱るとすぐにテーブルの上から逃げ去る。しかしであった。

すぐに柱で爪を研ぐ。昌哉にわざと見えるようにだ。

「またか。こらー！」

「ニヤーーーーーッ」

彼に叱られるとすぐに駆け去る。そうしてそのうえで物陰から覗く。悪いことをしていると明らかにわかっている、それが丸わかりであった。

「猫ってこんなに悪いものなの？」

「悪い？悪くないわよね」

「そうだよな」

しかし両親はだ。カミナリが何をしても怒らない。それどころか甘やかし放題という始末であった。彼の顔を見れば笑顔になっている。

そしてだ。悪いのはカミナリだけではなかった。

ワンもだ。まさにやりたい放題であった。

「ワン、ワン」

「ああ、わかったよ」

家の外からの鳴き声に応える昌哉だった。

そしてだ。父が買った縄を出してである。家の外に出た。そうしてそのうえで彼を散歩に連れて行くのであった。

「スコップとビニール持った？」

「持ってるよ」

家の中からの母の言葉に応える。

「ちやんとね」

「そう、じゃあ散歩御願いね」

「わかってるよ」

「御飯用意しておくから」

母はすぐに「こうも言ってきた。」

「それじゃあ御願いな」

「わかったよ。じゃあね」

こうしてワンの前に行く。するとそのワンはだ。

「フンフンフン」

「だから寄り付くなって」

いきなり昌哉にまわりついてきたのだ。まるでさかっているようである。

昌哉はそれを何とかどけながらだ。そのうえで言うのだった。

「行くぞ、早くな」

「ワンワン」

こうして彼を散歩に連れていく。しかし力は強い。身体は小さい犬だがそれでもだ。力は昌哉が思っていた以上のものがあった。

「こら、そっち行くなっての」

「ワン、ワン！」

「だからこっちだって」

手綱を握るだけでも必死だ。とにかく自分の好きなコースに行きたがるワンを無理にでも決まったコースに行かせる。それだけでも難しい。

第三章

ワンを決まったコースを歩かせてそのうえで糞の処理もする。そして家に帰って母が用意した御飯を出す。その時のワンの態度がまたかなりのものだった。

「あいな、御前な」

「ワン？」

「何でそんなに偉そうなんだよ」

皿の中にあるドッグフードを出しながらの問いだった。見ればワンはまるでふんぞりかえるように座ってだ。そのうえで待っていたのである。

昌哉はそんな彼に文句を言う。しかしそれでも届く筈もなかった。

「ワンワン」

「食わせろってことか」

「ワン」

この言葉はわかったようで応えてきた。

「わかったよ。ほら」

「ワン」

しかしであった。ワンはまた言ってきた。

そしてだ。御飯のお皿の横の水を入れた皿を右の前足でこつんとやってきた。そうしてそのうでまた鳴いて言ってきたのである。

「ワン」

「水じゃ駄目だっていうのかよ」

「ワン」

昌哉の言葉にこくりと頷く。どうやら本当に言葉がわかるらしい。つまり自分にとって都合のいい言葉はわかる犬であるらしい。

「ミルクか？ひょっとして」

「ワン」

その通りだと頷いてきた。

「そうか。わかったよ」

昌哉はうんざりとした顔でワンの催促に応えた。そのうえでミルクを出した。すると彼はそれに顔を近付けて美味そうに飲むのであった。

そして家に帰るとだ。もう一匹来た。

「ニヤンッ」

「今度は御前か」

カミナリだった。彼が足元にまとわりついてきたのだ。

昌哉は台所に向かって問うた。そこに母がいるのである。

「ねえお母さん」

「何？」

「カミナリに御飯あげたよね」

「あげたわよ」

ありのままの返事だった。

「ちゃんね」

「じゃあ何でこんなにまとわりついてきてるの？」

「遊んで欲しいんじゃないのかしら」

「遊んで欲しいの」

「そうじゃないの？」

こう彼に言うのである。

「それじゃないかしら」

「遊んで欲しいって」

昌哉はそれを聞いてだ。無然とした顔になった。カミナリはその間にも彼の足元にまとわりついてきている。そのカミナリを見ながらだ。

「何かなあ」

「遊んであげなさい」

「遊べって？」

「そうよ。カミナリちゃんが遊びたがってるからね」

「ちえっ、猫には甘いんだから」

「猫にだけじゃないわよ」

今の言葉にはすぐに訂正が来た。

「犬にもよ」

「ワンにもなんだ」

「そうよ、だからわかったわね」

「わかったよ。じゃあさ」

昌哉も憚然としながらだが頷いた。そうしてである。

彼はそのままカミナリの相手をした。棒を出してそれを彼の前に振ってそれを飛びつかせる。ねこじやらしの様にしてそうして遊ぶのだった。

第四章

こうしたことが続いた。彼はワンとカミナリの相手していた。そうして両親はそんな二匹を甘やかすばかりだ。全く怒りはしない。

「あつ、こらっ」

「ニヤッ!？」

テーブルの上に寝そべっているカミナリを怒る。まるでそこがベツドであるかの様に堂々と寝そべっていた。だが彼に怒られると慌てて逃げ出す。

しかもだ。テーブルには父が座っている。しかし平気な顔でカップ焼きそばを食べている。それだけで何も動こうとはしないのだ。た。

彼はその父を見てだ。むっとした顔でこう言った。

「怒らないの？」

「怒らないぞ」

平然と返す父だった。

「何で怒る必要があるんだ？」

「こんなに悪いことしてるのに」

そのテーブルの上で寝そべっていることを言う。

「それでも怒らないっていうの？」

「全然」

「全然って」

「カミナリは悪いことしてないじゃないか」

あまつさえこう言う始末だった。

「それで何で怒るんだ？」

「テーブルの上に寝そべっているのが悪いことじゃないの？」

「いいじゃないか、それ位」

「それ位って」

「とにかくカミナリは悪いことしてないぞ」

あくまでこう言う。言っているそのそばから折角畳んだ洗濯物をひっくり返してそのうえに横になる。ここでもまるで王者の様な顔をしている。

「全然な」

「してるじゃないか、今だって」

「だからそれ位いいじゃないか」

実際に全然怒る素振りのない父だった。それどころかである。

その好き放題しているカミナリに対してだ。満面の笑みを浮かべてこう言ってきた。

「なっ、カミナリ」

しかしカミナリは返事をしない。相変わらず偉そうではあるがだ。

「全然返事しないじゃない」

「心でわかっているからいいんだよ」

「全く。お父さんもお母さんもさ」

昌哉はいい加減怒ってだ。そのうえで父に言った。

「甘やかし過ぎだよ、カミナリもワンも」

「そうか？」

「そうだよ。おかげでどんどん我儘になってるし」

「我儘か？」

「我儘だよ」

また父に返す。

「どっからどう見てもさ」

「そうか」

「そうだよ。とにかくカミナリどけないと」

こう言うのである。洗濯物のところに来てそのうえでだ。また彼を叱った。

「いらっ」

「ニヤン」

「ニヤンじゃないっ、そこをどけ」

叱るがそれでもこうとはしない。カミナリがそこを去ったのは

暫くしてからだった。カミナリの我儘はエスカレートする一方だった。

そしてそれはワンもだった。御飯を食べ終えろとだ。

「ワン」

「ワンって何だ？」

ここで右の前足でその空になった皿をこつんとやってみせる。

それを見てだ。昌哉にもわかった。そのうえで彼に問うた。

「おかわりか？」

「ワンッ」

一声鳴きながらこくりと頷いてきた。その通りだというのだ。

「まだ食うのか」

「ワン」

「ワンじゃない、食べ過ぎだぞ」

こう言つとだ。不機嫌そうな顔を見せてだ。昌哉に鳴いてきた。

第五章

「ウウ~~~~~」

「そんなこと言うな、か」

「ワン」

その通りだというのだ。

そしてだ。また鳴いてきた。

「ワン」

「とにかく寄越せか」

「ワンワン」

今度は二回鳴いてきた。それも強い。

それを聞くとだった。昌哉も観念するしかなかった。そうしてお
かわりをやる。二匹の我儘はとにかくエスカレートする一方だった。

家は完全に二匹の為にあるものになっていた。まさにやりたい放
題である。昌哉はその我儘の世話をしていたがうんざりとしてだ。

ある日リビングでテレビを観ながらだ。両親に対して話した。

「あのさ」

「んっ!？」

「どうしたの？」

「ワンとカミナリのことだけれどさ」

話すのは当然二匹のことについてだった。それ以外にはなかった。

「あのさ」

「あのさ?」

「何かあったの？」

「我儘過ぎない？」

単刀直入に言った。

「本当にさ。我儘過ぎない、二匹共」

「いいじゃないか、動物だし」

「そうよね」

しかし両親はそれを聞いても呑気なままだ。その顔でテレビを観ている。クイズ番組であるタレントが壮絶な回答をしてテレビの中で爆笑が起こっている。

それを観ながら我が子の言葉に答えていた。そうして言っていた。

「別にな」

「それ位はね」

「何処がそれ位なんだよ」

しかし彼は言う。

「本当にさ。昨日も今日も我儘ばかりで」

「全然我儘じゃないし」

「全くね」

「何処がなんだよ。だからさ、少しは怒って欲しいんだけど」

本音を出した。

「お父さんもお母さんもさ」

「怒る必要はないからな」

「ええ、そうね」

相変わらずの調子である。しかしだ。

両親はここでも言ってきたのだった。

「ただな、御前もな」

「どうなの？」

「僕はって？」

「だからだ。御前はだ」

「あんたはどうなのよ」

「僕はって」

言葉を振られてだ。昌哉はまずはきよとんとした顔になった。そうしてその顔でその両親の言葉に対して応えるのであった。戸惑ったまま。

第六章

「僕が？」

「そうだ。嫌いか？ワンとカミナリ」

「それはどうなの？」

「嫌いじゃないけれど」

問われてそのまま頷く彼だった。

「別にさ、それは」

「そうだな。嫌いじゃないな」

「そうよね」

「だって家族じゃない」

思っていることをそのまま言った形だった。

「家族だし、ワンもカミナリも」

「家族だな、確かに言ったな」

「今確かにね」

「言ったよ、っていうか」

昌哉も両親の言葉に返す。

「それ以外の何なのさ、二匹は」

「そう、家族なんだよ」

「ワンとカミナリはね」

両親はここでまた我が子に対して話した。

「だから養子だって言ったな」

「カミナリだけじゃなくてワンもね」

「つまり僕と同じなんだ」

「わし等にとっては子供だ」

「血はつながっていないなくても人間じゃなくても可愛い息子達なのよ」

両親の顔はにこりと笑っている。そうしてその顔で話すのだった。

「それで家族だからな」

「わかったわね」

「そうなんだ。皆家族なんだね」

「それで嫌いな筈がないな」

「好きよね」

「うん、好きだよ」

またそのまま話した昌哉だった。ストレートにだ。

「ワンもカミナリもね」

「もう一つ言っておくぞ」

「いいかしら」

ここでまた話す両親だった。

「御前がそうしてワンやカミナリを好きならな」

「二匹共あんたを好きになるわ」

「そうなんだ」

昌哉は両親の言葉を聞いてまた頷いた。

「僕が好きなら」

「誰でも自分を好きな相手を好きになるからな」

「動物も同じよ」

「犬や猫も。本当かな」

「ほら、今来たぞ」

「そのカミナリがね」

両親が言うつとすぐにであった。そのカミナリが昌哉のところに来た。そして座っている彼の足元に来てだ。その顔を摺り寄せてきたのだった。

「ニャ〜〜〜〜ン」

「あつ、カミナリ」

「ほらな、好いてくれているな」

「わかるわね」

「うん、そうだね」

一度でなく何度も何度も摺り寄せてくる。そのうえで鳴いてもきている。

そしてだ。家の外からもだ。

ワンの声が聞こえる。それは。

「ワン、ワン」

「ワンも呼んでいる」

「あんたをね」

「散歩はもう終わったのに」

それでもまだというのだった。

「それでも呼ぶんだ」

「遊んで欲しいっていうかな」

「あんたの顔を見たいみたいね」

「そうなんだ。じゃあ」

「後で行くといい」

「早くね」

両親はまた言ってきた。

「御前を好いてくれてるんだからな」

「いいわね」

「わかったよ。それじゃあ」

昌哉もよくわかった。それならばだった。

彼は暫くカミナリの相手をしてから庭に出てそのうえで今度はワンの相手をした。そしてこれはこの日だけではなかったのだった。

それから毎日ワンとカミナリと一緒に遊び楽しみ日々を過ごした。二匹は家族として彼と共にいた。それは彼の少年時代をこのうえなく幸せなものにした。彼にとってはかけがえのない家族であったのだ。

独裁者二匹 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383o/>

独裁者二匹

2010年10月8日12時12分発行